

"採集標本の名前を聞く会" 雜感

小林貞七

福井市の郷土博物館では、昭和27年の創立以来毎年夏休の終り頃に小・中・高等学校の児童生徒の採集品に名前をつける会を継続して行っている。

この会に採集品を持参する者は、毎年500人から600人の間である。持ち込まれる採集標本は、植物・昆虫・貝・鉱物・岩石等であるが、一番多いのは植物である。

昭和43年度のこの会は、例年8月末に行なうのを例としていたが、国体を控えての年でいろいろの支障もあったので、約10日間を早めて18, 19, 20日の3日間とした。今年の特異な現象は、毎年初日にどっと押し寄せる生徒が、今年は3日目がその山になってしまった。新聞テレビで初日に集中する混乱を防ぐ為に依頼した報道が逆効果となってしまったようである。

来会の児童・生徒の数を概括すると次のような結果となる。

	8/18	8/19	8/20	計
小学生	市内 26人	56人	93人	175人
	市外 4人	5人	6人	15人
中学生	市内 21人	73人	164人	258人
	市外 5人	8人	19人	32人
高校生	0	0	0	0
一般	0	0	3人	3人
計	市内 47人	129人	257人	433人
	市外 9人	13人	28人	50人
合計	56	142人	285人	483人

3日間を通じて小学校で1番多かったのは、福井市の豊小学校児童で47名約10%を占め、中学校では、明倫中学生徒130名で約30%近い数を示した。市外で最も遠い学校からの来訪者は小学校では勝山市野向小学校、丹生郡宮崎小学校の児童であった。中学校では、三国中学校、今庄中学校の生徒諸君であった。

来会者を男女別に見ると、小中学校とも、男対女の比は2対3で、まじめな採集者（宿題成就者）は女子ということになるであろう。またこれを学年別にして検討すると、小学校児童では、

1年から6年に広がってはいるが、4・5・6年の高学年に多いのは当然のことである。中学校の生徒では、1・2年に集中し3年に稀であるのはどう解してよいのだろうか。

持参した標本は、植物が多く全体の90%を越していた。これはだれでもが容易に作れるということにもよううし、又このことから学校でも夏休の宿題として、おしばつくりを課しているのではなかろうか。

提示された標本を見て感することは、不完全なものがすこぶる多いことである。その第1は、根、茎、葉の3部を揃えることを教えられたことのある為か、まことに小さい根、茎、葉揃いの幼苗を標本としているものが中学生の中にまで非常に多い。誤った指導の結果と思われる。むしろ、できるだけ大きくて花か実又はほうしをつけたものを標本とせよと教えるべきであろう。これも口先や板書だけの指導でなく実物を示して教えることが最善ではなかろうか。

生乾きの標本でよいとは、小学校の低学年生でも思っていないはずだが、これ又すこぶる多いのは、察するに、せっぱつまって何とか急ごしらえで数だけは揃えねばならないし、その上名前がついていなければ標本の体裁を為さないところからの苦しまぎれの結果であろう。休暇明けの間際に、何もかも大車輪で片着けるいたいたしい現象がこの標本作りの上にもよくうかがえる。まだ生きて動いている昆虫を針ざしにして持参するのもこれと同類である。

名前を聞く会の使命は、折角作った標本に名前をつけてもらうことで、それぞれのものに親しみを持ってもらう第1歩を踏み出させるためのものと私は考える。名前1つ知らない街の人は、単なる路傍の人には過ぎない。名前を知る人には会釈の1つや挨拶の1つも交したくなるのが人情である。同様名前を知っていればあの草この木を見て通り過ぎるのも楽しい。1つの石、1匹の虫にも又然かりである。だがこの会にやって来る児童・生徒には、知ろうとする意欲も、関心も割合に少ないよう見られる。矢張宿題の体裁づくりに過ぎないのだろうか。元来子供たちは何によらず名前を聞いたがり、知りたがるものだが。

収集の児童、生徒に尋ねて見ると、自ら進んで採集したり、標本づくりをした者は非常に少なく、宿題として出されたからと答える者が大多数である。採集以前或は標本づくり以前の理科教育に期待したいところで知りたい、作りたいの意欲と態度を培うことがその根底にあってほしいものである。

福井市外の小・中学生には、間に合せや体裁づくりの者は少ない。随って聞く態度も真剣であり、標品そのもののできも上等である。さすがに遠くまで出掛けて来て、知ろうとする意欲の者ぞろいだと感ぜさせられる。

秋に行なわれる県下小・中学生の採集品コンクールの標品は大人顔負けである。

これ

もそれぞれの学校で特別に指導された結果であることは勿論だが、宿題として出された場合にも若干の指導が為されたら、随分と違った結果が多方面に現われるであろう。

昆虫11人、岩石鉱物化石8人、貝7人と植物標本持參者に比べると極めて少ない。然しこれ等の標品は、1・2を除いては概して上出来である。昆虫が、貝が石が好きな子供によって集められ、標本づくりがなされた為ではないかと推察される。なお親や先生の感化を受けて、その方面に深い関心と興味を持つに至った者も若干見受けられる。

福井市の郷土博物館では、例年数回の採集会が行なわれ、毎回100名を越す盛況である。參加者の多いことは結構ではあるが、多勢のために、採集品の名前を教えるのにせいいっぱいというところである。今後の採集会には山野の動植物岩石等に興味づけをすることを第1のねらいとし、かかる後に会の名にふさわしい営みを積み重ねたいと思っている。このためには、參加者の人数制限を行ない、一方では回数を増やして子供たちの要望にもこたえたいと思っている。